

障害者スポーツに関する研究

—障害に応じたスポーツの指導法— (聴覚障害者バレーボール)

桑 原 信 治

1. はじめに

わが国で積極的に障がい者スポーツが行われるようになったのは、1964年に東京で開催された、東京パラリンピック以降であった。(22カ国より567名、選手378名、役員189名)この「パラリンピック」は障がい者のオリンピックと言われている。このパラリンピックは、国際パラリンピック委員会が1989年に発足した。当時は、国際ろう者スポーツ委員会も加盟していた。しかし1995年に組織を離れ、替わりに、デフリンピック Deaflympics:聴覚障がい者を表す“deaf”と“Olympic”を合わせた造語で、デフの世界スポーツ大会)は、国際ろう者スポーツ委員会(聴覚障がい者)が運営し、4年ごとに開催されている大会である。パラリンピックが広く支援されている中で、デフリンピックはオリンピックと同一開催地で行う事がないので知名度はパラリンピックに比べたら低いが、多くの日本人選手がデフリンピックやろう者世界選手権大会の開催、そして各国のろう者スポーツの振興など着実な取り組みを続け活躍している。現在の加盟国は94カ国である。

もう一つこちらも知られていないが、スペシャルオリンピックがある。これは知的障がいや発達障がいなどの人が参加する大会である。パラリンピックやデフリンピックは競技性が非常に高く、記録を目指してプレーをするが、スペシャルオリンピックは日ごろ行っているスポーツトレーニングの成果を発表する場として行われている。このように障がい者スポーツはパラリンピックだけでなく、様々な大会が行われている。

一方国内競技では、東京パラリンピックの成功を踏まえ1965年より、全国身体障害者スポーツ大会(全国障害者スポーツ大会)を行われた。開催については、毎年実施されている国民体育大会の直後とし、大会開催場所は当該国民体育大会開催都道府県において実施された。1965年第1回大会が岐阜県で開催された。以後2000年の第36回大会(富山県)まで開催され、障がい者スポーツの普及・振興に多大な成果を遂げた。

知的障がい者のスポーツは、1960年第まで入所施設、養護学校、特殊学級での体育訓練や体育的行事等に限ら

れ、身体障がい者のスポーツに比べ立ち遅れていた。その後、第1回大会が(1992年)東京都から全国知的障害者スポーツ大会を開催することになり、2000年の第9回大会(岐阜県)まで開催された。2001年より全国身体障害者スポーツ大会と全国知的障害者スポーツ大会が統合され、新たに全国障害者スポーツ大会として開催されることになった。なお、この全国大会を開催するに当たり、全国身体障害者スポーツ及び全国知的障害者スポーツ大会で実施した競技種目や参加者について、変えないということであったが、国が認定している障がい者のうち、精神障がい者と内部障がい者が参加不可能となっていたが、第8回大分大会より精神障がい者バレーボール及び内部障がい者は、まずは、ぼうこう又は直腸機能障がい者の個人競技への参加を認めることになった。

障がい者にとってスポーツを行うことにより、単に体力が向上するだけでなく、積極的な自立と社会参加を促進する上から重要である。そこで、障がい者のスポーツ指導に求められることは、医学的な側面はもとより障がいについての理解を深め、一般的なスポーツの指導に優れることが求められる。

障がい者が親しんでいるスポーツは、一般的なスポーツの競技規則とほとんど同じか、あるいは障がいのために出来ないことがあったり、安全上に問題があるため、一部障がい者用にルールを変えて行うものなどいろいろとある。また、障がいに合った用具や器材を開発することで行われるようになった競技もある。

障がい者には、身体障がい(肢体不自由、視覚障がい、聴覚障がいなど)知的障がい、精神障がいなどがある。障がい者にとっては、自己の受けている障害を少しでも軽くしたいという願いの実現と、健康の維持、増進という立場から行われるスポーツの実践は、障害のない人以上に大切であることが指摘されている。

このようなスポーツ実践が必要な方がスポーツの振興を目的として、指導者育成の講習会を財団法人日本障害者スポーツ協会では、1983年に公認身体障害者スポーツ指導者制度を発足し、指導者登録や制度に関する事務局を内部に設置、本格的に指導養成事業が整備された。

表 1. 障害者スポーツ指導員年度別登録者数

年 資格	1991	1995	1999	2000	2005	2009	2010	2011
初 級	1,022	3,921	10,257	12,235	18,872	18,603	18,706	18,841
中 級	234	360	693	853	1,833	2,138	2,322	2,395
上 級	63	114	255	287	481	560	685	688
合 計	1,319	4,395	11,205	13,375	21,186	21,301	21,713	21,924

(＊ 1991 年から 2011 年 12 月末現在の人数)

この制度による資格は、初級障害者スポーツ指導員、中級、上級、スポーツコーチ（2011 年度から、独立した資格として移行する）が今日に至っている。2011 年度登録の指導者が 21,924 名（表 1）になり、全国の障害を持った方にスポーツ支援を行っている。

障がい者スポーツは、一般的にイメージされていた「リハビリテーションの延長」という考え方から生涯スポーツや競技スポーツなど、障がいのない人々と同様な目的で行われていることが知られるようになった。その結果、ノーマライゼーション社会の構築に向けた役割や障がい者の自立や社会参加を支援するという役割も果たし、障がい者スポーツの発展には目覚ましいものがある。

本稿では、聴覚障がい者バレーボール競技についての指導法を提供し、障がい者スポーツの普及に貢献できることを目的とした。

2. 対象者

対象は、2011 年 10 月山口大会第 11 回全国障害者スポーツ大会、2012 年 10 月岐阜大会開催された、第 12 回全国障害者スポーツ大会に出場した聴覚障害者バレーボール競技に参加した岐阜県代表選抜チームである。（写真 1）

写真 1. ぎふ清流大会第 12 回障害者スポーツ大会出場



表 2. 選手の聴力

イニシャル	裸耳聴力		コミュニケーション方法
S . K	右 105 dB	左 118 dB	手話・口話によるコミュニケーション
K . N	右 100 dB	左 96 dB	手話・口話・聴覚によるコミュニケーション
Y . M	右 75 dB	左 65 dB	手話・聴覚によるコミュニケーション
M . Y	右 102 dB	左 101 dB	手話・口話・聴覚によるコミュニケーション
H . M	右 95 dB	左 78 dB	手話・聴覚によるコミュニケーション
F . M	右 76 dB	左 73 dB	手話・聴覚によるコミュニケーション
E . M	右 115 dB	左 117 dB	手話・口話によるコミュニケーション
T . R	右 70 dB	左 73 dB	手話・聴覚によるコミュニケーション
I . Y	右 90 dB	左 93 dB	手話・聴覚によるコミュニケーション
T . S	右 54 dB	左 50 dB	聴覚によるコミュニケーション
Y . S	右 56 dB	左 58 dB	手話・聴覚によるコミュニケーション
K . N	右 91 dB	左 93 dB	手話・口話・聴覚によるコミュニケーション

このチーム 2012 年ぎふ清流大会に向けて、4 年前 (2009 年) から月 2 ～ 3 回の強化練習を行っている。

チームの構成は、岐阜聾学校の在校生、卒業生以外に、一般高校に通う聴覚障がい者も加わり、ぎふ清流大会優勝を目指した。年齢は 18 歳から 26 歳で平均年齢は 19.25 歳、平均身長は 159.2cm である。

選手の聴力の程度について表 2 に示した。すべての選手は身体障害者手帳が交付されている。

聴力は医学的にはデシベル (dB) で区分する。(表 3 に示す。) デシベルとは音圧レベルの単位であり、音の大きさが大きいほど高い値を示す。これにより健康な場合に対しどれだけ聞こえが悪くなったかが示される。両耳で 70dB 以上になると、身体障害者手帳を交付される。10dB ～ 30dB は、「ささやき声もよく聞こえる」30dB ～ 50dB は、「小声が聞きにくい」50dB ～ 70dB は、「普通の声が聞きにくい」70dB ～ 90dB 「大きな声でも聞こえない」90dB ～ 100dB は、「耳元での大きな声でも聞こえない」100dB を超えると「通常の音は聞こえない」レベルになる。

このように聴覚障がい者の程度には、少し聞こえにくいという状態から、まったく聞こえないという状態まで、個人差が大きい。また、聴覚障がいによっては、音は聞こえても言葉は聞き分けられないという場合がある。さらに、補聴器をつけることで音が聞こえるようになる人がいる一方で、コミュニケーションは手話で行う。「手話を第一言語とされる」人もいる。軽度難聴から高度難聴などの難聴者、成長してから聴覚を失った中途失聴者、加齢により聴力が衰える老人難聴者が含まれる。

表 3. 聴覚障害の dB 区分

dB	聴覚障害	聞こえの程度
0	聴者	
10		ささやき声
20		
30	軽度難聴	
40		普通の会話
50	中度難聴	
60		
70	高度難聴	大声
80		
90		怒鳴り声
100	ろう	ガード下での鉄道走音
120		
130		飛行機のエンジン音

3. 健聴者のバレーボール指導展開

(1) 指導展開の留意点

障害者スポーツ (聴覚・知的) のバレーボール競技として、特別なバレーボールを作ってものではなく、一般的に行われている競技方法で行われる。但し、審判員ハンドシグナルにおいては一部変更される。

バレーボールの大きな特徴は、ネットをはさんで複数の競技者が一つのボールをつなぎ合い、ゴール以外の身体の動きは、直接相手チームに妨害されることがない。よって個人技能も、集団技能も味方チーム内において、集団としての技能生かし、ゲームで発揮できるように練習した後に、相手のサーブに対して、3 回以内などの攻撃などに対してのレシーブやブロックなどができるようにしていくことが原則となる。ネットを境にしてのラリーの攻防は変化が激しく、常に多くの情報を把握し状況判断を的確にすることが求められるが、これらのほとんどが視覚からの情報である。このようにバレーボール競技の特性であることで、それに合った指導の原則を具体化する。

(2) 基本技術の指導課程

バレーボールを指導する場合、指導者はバレーボールの技術がどのような要素から構成され、どのような順序で教えていけばよいかということを知っておかなければならない。これからの技術指導には、次の 3 条件を十分考えて指導することが大事である。

- ① バレーボールの技術にはどのような種類があり、さらにその各々がどのような要素で構成されているか理解する。
- ② バレーボールの基本技の指導からゲーム時に必要なフォーメーションプレーまでどのような指導課程で展開すべきか。
- ③ 指導をうける選手が何に興味を持ち、何を感じているか。どこに体得する上の困難さを感じているか。

バレーボールの指導を何から始めるかについては、従来のほとんどの指導者は、オーバーハンドパスからとしている。しかし実際にオーバーハンドパスを初心者に指導するとなると多くの問題に直面する。第一に、ボールハンドリングは捕えて投げ返せないバレーボールの独特の技術であり、第二にボールの正面にすばやく移動しなければならないという、異なった二つの技術要素を同時に教えなければならないむずかしさがある。これらの二つの要素をあらかじめ別々に練習し、その後二つの要素を統合し、完成するのが正しい指導の課程である。

したがって、初心者に最初からオーバーハンドパスを

教えてバレーボールのむずかしさに困惑させるよりも、アンダーハンドパスから導入してボールに対する恐怖心をなくし、ボールに十分ならした方が良く考える。
大切なことは、選手の能力と進歩の度合を考えながら、

いつ導入するかを考慮し、無理なく自然な形で体得させることである。

以上の点から指導者は、選手の個人差を考慮しながら練習過程を段階ごとに進めていく。練習内容を表4に示した。

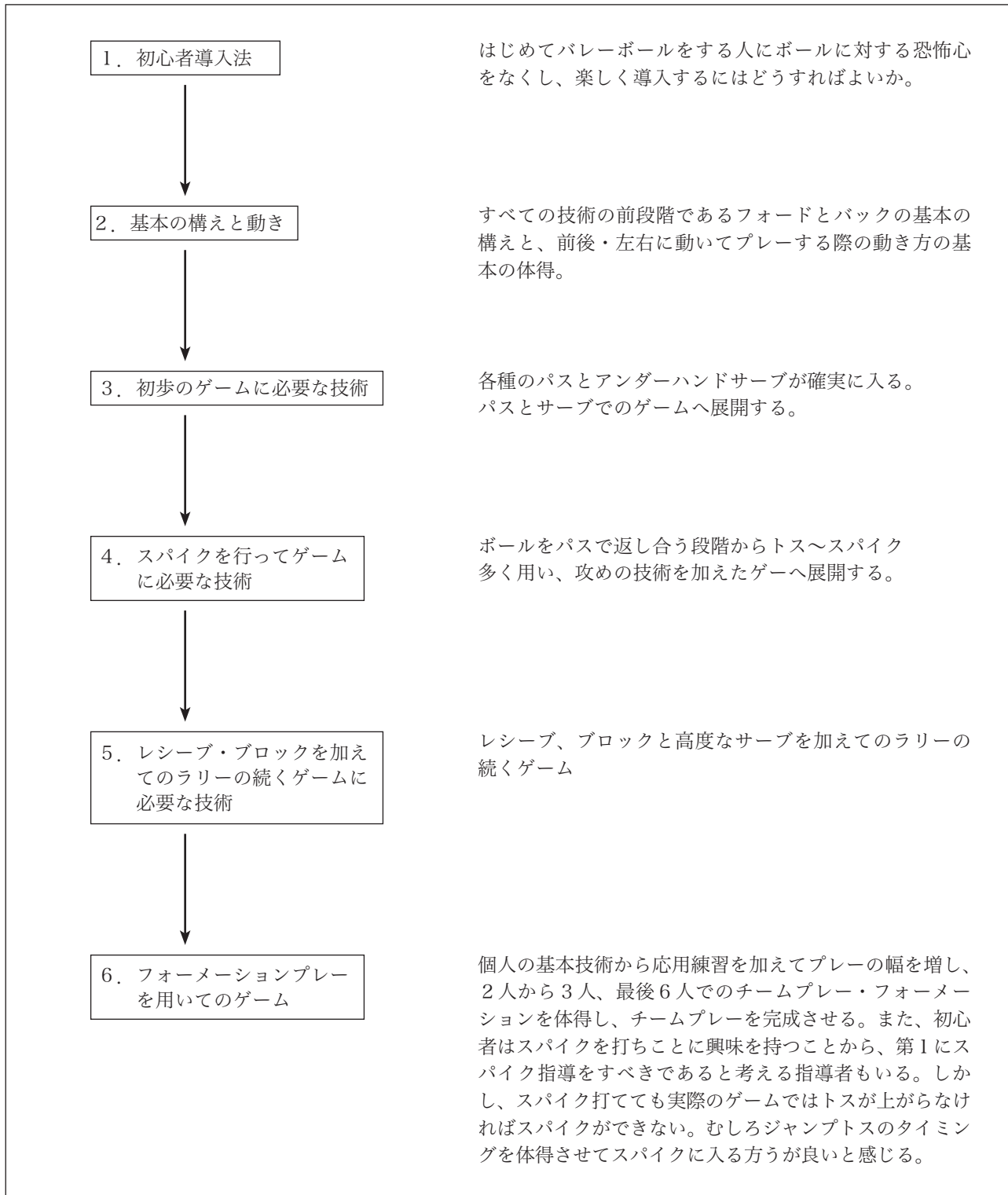


図1. 基本技術の指導課程

(3) 通常練習内容について

準備運動では、ランニング等で汗をかいてから準備運動、特にバレーボールの練習時に多い負傷防止のための足首・膝・腰・肩の回旋運動および指・手首の屈伸運動を十分に行い、次にストレッチで筋や腱を十分に伸ばす。また、疲れが残ったりしている場合は、筋肉痛等のある時はスポーツマッサージを行う。

ボールを使った基礎練習では、2人組でキャッチボール、スパイクスウィングで肩慣らしを行い、パスに入る。オーバー・アンダーハンドパス・バックパス、ジャンプパスなど行ってから、対人レシーブを正面・前後・左右・フェイントのレシーブを行い、連続対人レシーブを行う。

レシーブの複合練習で、2人組の二段トス、3：1レシーブ、6人でのつなぎの連携のシートレシーブを行う。

スパイクでは、直上トスからの連続スパイク、二段スパイクからコース打ち、そしてスパイクコンビのチャンスボール、レシーブ、サーブレシーブからのコンビスパイクを行い休息する。(5分の休息、水分補給、着替え等を行う)

表 4. 練習計画の内容

1) 準備運動
・ランニング：前後走、サイドステップ、
・準備運動：全身ストレッチ（練習時に多い負傷防止の部位）
・筋力トレーニング：腹筋、背筋、ジャンプ系のトレーニング
2) 基礎練習：パス、トス、レシーブ
・2人組でのキャッチボール、スパイクスウィング、パス、
・対人レシーブ：正面・左右・フェイントレシーブ
3) レシーブ
・レシーブとトス（二段トス）、3：1レシーブ、シートレシーブ
4) スパイク
・直上トスのスパイク、二段スパイクコース打ち
・スパイクコンビ：チャンスボールからコンビ、レシーブ・サーブからのコンビ
5) 休息（水分補給、着替えなど）
6) 6人でのつなぎ
・チームプレー、総合・複合練習、ゲーム的練習
7) サーブ練習
・コース打ち
8) 欠点補強の練習
・サーブレシーブ等
9) 整理運動
・ストレッチとマッサージ

6人でのつなぎ練習では、アタックレシーブからの6人でつなぎを（フォーメーション）を確認しながら、攻守のフォーメーションとコンビネーションプレーへと展開を連続して行ってから、ゲーム形式の乱打を行う。

ゲームを2～3セット行い。ゲームの内容で欠点を補強の練習をする。サーブ練習では、サーブレシーブの練習も入れながら調整する。

練習後は、ストレッチ、マッサージ等を行い、疲労を除き身体の調子を整え、次の日の練習にベストコンディションに持っていけるよう整える。

4. 聴覚障害者バレーボールの指導法

ボールゲームにおいて、「見る」ことが中心である。聴覚障害者バレーボールにとって、視覚から得る「情報」をどのように活用すれば技術や動作の向上に効果があるか。その手段として「見る」ことをどのように捉え、分析したらスポーツ指導に有効であるか。

また、一つのプレーの形を身につけるためには具体的にどのような方法がよいか。以下「見る」だけでなく「情報の処理」及び動作について、一連のプレーを体得するための手順や方法を考えてみる。

[1] 指導上の留意点

(1) 障害者のスポーツ指導に共通して留意する事項

① スポーツをする目的を明確にする

一般的にスポーツに親しんでいる人の参加目的は、健康・体力の維持・増進、仲間との交流、当然、競技スポーツとして激しいトレーニングを行っている人もいる。目的に合わない指導をすると継続が難しくなるので、スポーツ導入の初期段階で目的を明確にすることが必要である。

② 医師との連携を勧めること

いかに障害が進行していないといっても、障害を受けていることは事実であり、運動の積み重ねが障害の部位に悪影響をもたらす危険性は免れない。いかなる理由があっても受けている障害をさらに悪化させない。

③ 施設、用具やルールの工夫をする

スポーツを楽しむためには、施設、設備、用具やゲームの進め方、また年齢、性別体力や技能の違いなどによって、障害を受けている人たちの工夫というのは、通常親しまれているスポーツのルールの検討によって行われる。

④ 運動量に留意する

一人ひとりの運動量がつかみにくい。また、外見的には動きが少ないが、筋の緊張や不随な動きなどのために疲労が激しい場合もある。指導者には常に声をかけ、そ

の反応や疲労度をチェックする必要がある。

⑤ 安全に留意する

活動場所に危険な箇所はないか十分なチェックする。危険が予想される場所はそれを回避する手立てを考える。

⑥ 継続しようとする意欲を喚起する

障害者が初めてスポーツをやるとき想像以上に不安である。そのためには、他人との比較を避け、一步一步上達していくことの自覚、仲間が増えていく喜びや運動後の爽快感の体験によって、運動継続への意欲を喚起する。

⑦ フォームにこだわらない

フォームについての基本的な考え方は、合理的なフォームの獲得を大切にしながらも、身体に障害を持つ者にとっては、リラックスした状態を崩さないフォームの獲得を目指す。

⑧ 協調性を育てる

障害があるから協調性が欠けるのではなく、集団の中での社会的経験が少ないために個人的な行動が目立つことがある。したがって、集団の質と量を与えていくことによって協調性は育てられる。

[2] 聴覚障害者に指導する留意する事項

一般のスポーツ実施上の留意点について配慮すれば良いが、一緒に行う人は、コミュニケーションを図りやすいように、表情や口をはっきり動かすことが大切である。聴覚や言語に障害を持っている人は、運動機能上の障害はないが運動経験が浅く視覚障害者にとって一連のプレーとは、その動作を含めて「見る」という情報そのものと、「見た」情報を的確に処理する能力やその処理した情報をもとに行動に移す身体運動能力に分かれる。そこで、視覚障害者の指導社において必要な要因として以下のことが考えられる。

- ① コミュニケーション手段の確認
- ② しゃべり方に注意
- ③ 明るさや太陽の位置に注意
- ④ コミュニケーションツールを複数もつ
- ⑤ わかったふりをしない
- ⑥ 練習内容やポイントなどを書いた資料の準備
- ⑦ バックグラウンドノイズは最小限にする

5. 「ボールを見る」「サインを見る」集中力の練習

バレーボールに必要な見る要素として、一瞬でもボールから目を離すことできない状況下で正確な判断ができることが必要である。またコンプリバレーをやるためには、セッターが重要である。健聴者のように声での連携プレーができない、聴覚者は手話でのコミュニケーション

ンやアイコンタクトなどで確認するためには見る、互いに目をあわせということが必要である。特にセッターは、スパイカーからのサインを見て、トスを上げるためのコミュニケーションの連携が必要となる。以下に見て、サインをだす練習内容を示した。

写真2・3は、相手にパスする前に、相手が出した数を指で相手に伝達し、相手にパスを返す前に違う数字を指でサインを出してパスをする。

表 5. オーバーハンドパスの練習内容

1) オーバーハンドパス 2人組でオーバーハンドパスをして、相手にパスする前に相手の指の数を指で示しパスする前に相手に違う数を示す。(1 分間)
2) オーバーハンドパスのバックパス 同様に、直上パスする前に相手が指で出した数を指で相手に示し、後ろへ向いく前に相手に指で数を出す。(1 分間)
3) 二段トスレシーブしたボールをトスする前に相手が指で出した数を、指で示してパスをする

写真 2. オーバーハンドパス①



写真 3. オーバーハンドパス



写真4・5は、直上パスからバックパスをする。相手から出された指の数を指で伝達し、直上パスをして、相手に背を向けてバックパスで相手にパスをする。

写真 4. オーバーハンドパス①



写真 5. オーバーハンドパス



写真 6. アンダーハンドパス①



写真 7. アンダーハンドパス②



写真 6・7 は、2 人組でアンダーハンドパスをして、相手にパスする前に指で数をサインを出して、相手にパスをする。

写真 8. アンダーハンド・バックパス



表 6. アンダーハンドパスの練習内容

1) アンダーハンドパス 2 人組でアンダーハンドパスをして、相手にパスする前に相手の指の数を指で示しパスする前に相手に違う数を出す。(1 分間)
2) アンダーハンドパスのバックパス 同様に、直上パスする前に相手の指の数を指で示し、後ろへ向いく前に相手に指で数を出す。(1 分間)
3) 2 段トス (2 : 1) 2 人組で一人がレシーブし、トス上げる者はボールに書いてある数字を指で示し、トスを上げる。(10 本 1 セット)

写真8は、アンダーハンドパスで直上パスをして、バックパスで相手に返す。相手にパスする前に相手の指の数をサインで伝達してパスする。

写真9. 2:1のレシーブ(1)



写真10. 2:1の2段トス(2)



写真9・10は、2人組で一人がレシーブをする。トス上げる者はボールに書いてある数字を指でサインを伝達しトスを上げる。

表7. サープレシーブの練習内容

①	ボールに書いてある数字を指で示し、セッターに返球する。(10本1セット)
②	ボールの数字が奇数なら平行パス、偶数ならセッターに大きく返球をする。(10本1セット)

写真11は、サーブレシーブの練習で、ボールに書いてある数字を指でサインをだし、セッターに返球する。また、ボールの数字が奇数なら平行パス、偶数ならセッターに大きく返球をする。

写真11. サープレシーブ練習



表8. スパイクの練習内容(相手のコートを見る)

①	コートのコーナーに、目印にカラーコーンを置いてボールがセッターに入る前に、コーナーを確認して打つ。(10本2セット)
②	レシーバーをコートに入れ、レシーバーは前後に動き、レシーバーの位置を確認し、いない所にスパイクを打つ。(10本2セット)
③	2人のレシーバーを入れ、空いている場所を確認し、その場所を狙ってスパイクを打つ。(10本2セット)

写真12は、コートのコーナーに、目印にカラーコーンを置いてボールがセッターに入る前に、コーナーを確認

認してクロスに打つ。

写真 13 は、コートのコーナーに、目印にカラーコーンを置いてボールがセッターに入る前に、コーナーを確認してストレートに打つ

写真 14 は、レシーバーをコートに入れ、レシーバーは前後左右に動き、アタッカーはレシーバーの位置を確認し、いない所にスパイクを打つ。

写真 12. スパイク練習 (1) (クロス打ち)



写真 13. スパイク練習 (2) (ストレート打ち)



表 9. ブロックの練習内容

①	0～9の数字の内、1つを指で示し、奇数なら左、偶数なら右ヘワンステップしてブロックをする。(5本2セット)
②	0～9の数字の内、2つを指で示し、その数をたして、奇数なら左、偶数なら右ヘワンステップしてブロックをする。(5本2セット)
③	0～9の数字の内、2つを指で示し、大きい方の数から、小さい方の数を引いて、奇数なら右、偶数なら左ヘワンステップしてブロックをする。(5本2セット)
④	0～9の数字の内、2つを指で示し、その数を掛けて、掛けた数が、奇数なら右、偶数なら左ヘワンステップしてブロックをする。(5本2セット)

写真 14 は、レシーバーをコートに入れ、レシーバーは前後左右に動く、アタッカーはレシーバーの動き・位置を確認し、いない所にスパイクを打つ。

写真 14. スパイク練習



写真 15. ブロック練習①



写真 18. 相手を見る



写真 16. ブロック練習 (1)



写真 19. 相手からの攻撃レシーブシフト(センター攻撃)



写真 15 は、0～5 (片手) の数字の内、1つを指で示し、奇数なら左、偶数なら右へワンステップしてブロックをする。

写真 16 は、0～5 (両手) の数字の内、2つを指で示し、大きい方の数から、小さい方の数をたして、奇数なら左、偶数なら右へワンステップしてブロックをする。

写真 17 は、0～9 の数字の内、2つを指で示し、その数を引いて、奇数なら左、偶数なら右へワンステップしてブロックをする。

写真 17. ブロック練習 (2)



写真 18 は、相手の攻撃のサインを見て、ブロックからレシーブから攻撃に繋げる切り返しの練習。

相手チームにボールが移ると、プレーヤーはまず基本の守りの位置に構える。次ぎに相手のトスと攻撃位置に対してフォーメーションを組むことになる。写真 19 は、センター（真ん中）からのフェインレシーブからトスを上げスパイカーにつなぐ、チームの連携である。

6. まとめ

本稿では、聴覚障害者バレーボール競技の指導法について、岐阜県選抜チームを対象に指導をした。聴覚障がい者の練習状況や指導者との関係、コミュニケーション方法、ボールを見てサインプレー、大会の結果を以下に示すような事柄について明らかにすることができた。

(1) 聴覚に障がいをもっている(身体障害者手帳保持者)ことが条件となる。バレーボールのルールなどは健聴者と同基準で行われる。聴覚障がい者がバレーボールを行う中で、一番のポイントは6人のコミュニケーションをどうとるかである。聴覚障がい者は、コミュニケーションを手話や口話法を用いて行うが、練習や試合では仲間の声が聞きとれなく、一つのボールをみんなが夢中で追いかけることでぶつかったり、見合ったりというプレーが随所に見受けられる。

また、スパイクのサインにおいては、セッターとのコミュニケーションが必要となるが、決まったポジションにおいては、問題なくこなすことができるが、試合中長いラリーの中でポジション変化が起こったりすると、コンビミスなどを起こる場合もある。そこをクリアすることは難しく仕方がないプレーと捉える必要がある。

課題としては、相手のプレーを予測して伝え合うことができないため、ラリー中のことである。例えば、健聴者であると試合のラリー中に、相手のプレーに対して6人の中で誰か一人が気付いたプレーを声に出して仲間に伝えることができるが、聴覚障がい者はそれができない。そのための練習も確立されていないことであり、今後、考えて行く必要がある。

(2) 平成 23 年度全国障害者スポーツ大会山口大会は全国大会初参加ということで、相手に胸を借り、平成 24 年度の岐阜大会に繋げるという意味合いで、試合に臨みレギュラーの平均身長が低いため、サーブレシーブやチャンスボールからのコンビバレーに活路を見出だそうと練習に取り組んだ。試合は、精神的にも安定して試合が行うことができ、初優勝という結果であった。

平成 24 年度岐阜大会では、チームの戦略としては、昨年同様コンビバレーを多用することを目指し、試合に

臨んだが、サーブレシーブが多き乱れ、修正することができずに、レフト中心の単調な攻撃となり、相手(兵庫県)のエースは聴覚障がい日本代表のメンバーで、レフト対決になると分が悪く、レフトの決定力の差がそのまま試合結果として表れ初戦敗退という結果であった。(1 回戦対戦した兵庫県が優勝した)

(3) 指導者は聴覚障害者の障害の程度を理解し、競技面のサポートだけでなく練習の環境づくりも気を配っていく必要がある。障がいがあることによって消極的な行動をさせない配慮も必要である。

7. 課題

今回、聴覚障がい者のバレーボール指導をして、一番感じたことは指導者の持つ専門的な知識を聴覚障がい者に分かりやすく伝える方法は、コミュニケーション方法は手話、口話、発語、筆談の方法があるが、やはり手話を指導者が覚え、伝えたいことを身振りで表現し伝達する方法を身につけることが必要と感じた。

また、技術の課題として、今回ボールに集中し見る(相手、ボール)ことの「状況判断でき、それに対して反射的に動ける、反復練習の必要性、プレーではコンビバレーを中心に組み立てる上でサインプレー、またサーブレシーブの返球率を高める及びサーブの効果を高める練習時間の必要性を感じた。今後、障がい者の指導するにおいて、これらの点の注意して行きたい。

また、デフリンピックを知らない人が多い。もっと多くの方に知ってもらい、理解してもらうことが必要である。そのためには、日本でデフリンピック、またはデフバレーの世界選手権大会の開催出できれば広く国民に普及することができると感じる。将来的な競技環境の整備、競技レベルの向上、そして優秀な選手をデフバレーにつながる基礎となることを期待したい。

謝辞

本著をまとめるに当たり、ご協力いただいた聴覚障がい者バレーボール岐阜選抜チーム

のスタッフ、選手の方々において、練習の指導、資料提供をいただきました。ここにお礼を申し上げます。

(引用・参考文献)

1. 大川裕二(2009)「我が国のデフバレーボールの普及、発展に関する研究」, 早稲田大学大学院スポーツ科学研究
2. 日本デフバレーボール協会公式HP
3. 聴覚障害者についての公式HP
4. 財団法人日本障害者スポーツ協会編, 「障害者スポーツの歴史と現状」, 日本障害者スポーツ協会, 2010 年

5. (財) 日本障害者スポーツ協会編, 「障害者スポーツ指導教本 (初級・中級)」, ぎょうせい, 2010 年
6. 財団法人日本障害者スポーツ協会編, 「全国障害者スポーツ大会、競技規則集」, 日本障害者スポーツ協会, 2010 年
7. 藤田紀昭, 「障害者スポーツの世界」 角川学芸出版, 2008 年
8. 矢部京之助, 草野勝彦, 中田英雄編著 (2009): アダプテッド・スポーツの科学, 市村出版, 藤田紀昭 2009 年
9. 財団法人日本バレーボール協会編, 「バレーボール指導教本」, 大修館書店, 2010 年
10. 財団法人日本障害者スポーツ協会編 (2010) 「全国障害者スポーツ大会, 競技規則集」 日本障害者スポーツ協会
11. 藤田紀昭 (2008): 障害者スポーツの世界, 角川学芸出版
12. 矢部京之助, 草野勝彦, 中田英雄編著 (2009): アダプテッド・スポーツの科学, 市村出版
13. 吉田 正, 氏原 隆, スポーツビジョントレーニングの事例研究 (2) —大学女子バレーボール選手におけるビジョントレーニングの効果について—, 愛知教育大学体育教室研究紀要, No24, 1999